



セカンドライフとしての選択。 剣道七段の腕を活かして、シニア海外ボランティアへ。

放送局の記者として定年まで勤め上げた松村さんが見つけたのは、「シニア海外ボランティア募集・剣道指導者」の文字。「50年間、趣味で続けてきた剣道が役立つなら」と迷わず応募し、トルコへ旅立ちました。海外での特派員経験もあり、世界史や異文化が好きだった松村さん。数々の経験をして帰国後、応募年齢制限の69歳を目前に次はセルビアへと向かいます。アクティブな松村さんが、異国で剣道を通じて学び、感じたことなどを伺いました。

趣味の剣道が役に立つ喜びと、異文化交流の楽しさを感じました。

大学卒業後に放送局に入局し、長年、報道関係の仕事をしてきました。国内の地方だけでなく、外信部に所属していた時は特派員としてジャカルタに3年駐在したこともあります。外信部はもともと、海外への関心が高い社員が集まる部署です。例に採れず私も、昔から世界史や異文化に関心を持っていました。

JICAの存在が身近だったのは、同僚たちの中に「JICA専門家」として、ディレクターや技術関係、放送全般のアドバイスなどをするために途上国に派遣されていた人がいたからです。私は海外で活躍する同僚に、現地でどんな仕事を行ってきたのかなど、様々な話を聞いて海の方角に思いを馳せていました。定年が近づいてきた頃には「機会があればもう一度海外に行きたい」という思いも強くなり、在職中に日本語教師の資格を取得したほどです。退職後は大学に勤め、任期終了に合わせて、シニア海外ボランティアの門を叩きました。

まずは、どのような職種での募集があるのかを調べるところから始まりました。すると、募集情報の中に「剣道指導者」の文字があったのです。私は中学2年生の時に剣道を始め、その頃には七段を取得していました。それを見つけた時に「趣味の剣道で海外に行かせてもらえるなら、この上ない」と思いました。

ずっと続けてきた仕事で国際貢献をすることも考えましたが、個人的には「そろそろ別のことをやってみよう」という思いもあり、剣道で応募するに至りました。

最初の派遣先はトルコ。そして帰国後5年で、再びシニア海外ボランティアに応募し、セルビアへと行かせていただきました。2度目に応募した理由は、69歳の年齢制限が迫り、もう一度海外へ行きたいと思ったからです。それは、トルコでの経験が素晴らしいものだったからに他なりません。



▲ 剣道を通して日本とセルビアが交流

防具や竹刀を揃えたり、雑巾掛けをしたり。 トルコでは、環境の整備に舌先の連続。

トルコのアンカラ大学では、スポーツ学部で配属されました。ところが、スポーツ学部の学生はみな教師志望です。ゆえに卒業後に剣道を設立する機会がなく、残念なことに剣道教室の募集をして人も集まりませんでした。そこでアンカラ大学全体、かつ、他大学や社会人などに声をかけ、大学の体育館を使って週に3回剣道を教えることになったのです。イスタンブールにも剣道クラブがありまして、そちらに出かけて行って教えることもありました。

私の剣道クラスには多い時で100名程度生徒が集まりましたので、剣道具を揃えるのに苦労しました。贈られた日本人学校から防具を譲り受け、さらに業務費でも竹刀をたくさん買う必要がありました。竹はヨーロッパでは採ることができないため、竹刀は輸入品になります。その上日本より空気が乾燥しているため、とても壊れやすいのです。だからトルコでもセルビアでも剣道は「お金のかかるスポーツ」というイメージでした。そういう事情がありながらも、彼らには剣道が続けてくれる情熱があったのです。彼らが真面目であればあるほど、こちらも嬉しいし、その気持ちに応えたいと思いました。

アンカラ大学の体育館では球技を行う学生が多いため、土足で床が汚れます。そこで、稽古の前に行ったのが雑巾掛け。そういう文化のない国ですから最初は驚かれましたが、先生の言うことはよく聞く生徒たちで、みんな積極的にやってくれました。また、「道場は自分たちが教えてもらう場所だから、敬意を示すために入る時はお辞儀をする」「履物を入口にきちんと揃える」といったことにも、生徒は素直に従ってくれました。それを見ていた空手部が真似をして履物を揃えているのを見た時は、感動しましたね。

未経験から始めて二段を取得したトルコの生徒や、世界選手権で活躍するセルビアの生徒の姿に感動。

トルコはまだ剣道の歴史が始まったばかりで、初心者も多くいました。イスタンブールには剣道協会がありましたが、国際剣道連盟に加わる資格もありませんでした。剣道は、打ち合いができるようになるまでにとてども時間がかります。お金もかかり、なかなか上達しない中で、やめていく人も多かったトルコ。それでも2年間教える中で、未経験から始めて二段を取得した生徒が3人生まれたのです。近くに殺害堂を行っている場所もなく、ヨーロッパまで引率するなど大変ではありましたが、3人の成長は立派なものだと思いました。また、協力隊員が指導している周辺の国々の剣道クラブをアンカラに招いて国際大会を開催した際には、審判を置いた正式な形で試合をする機会にみんな大喜び。試合を見てくれた人に、剣道を広めるきっかけにもなりました。

一方、セルビアは30年以上も前から剣道が続けられている国です。国としても剣道連盟を作り、国際剣道連盟にも加入していました。私は首都のベオグラードに3カ所ある剣道クラブを週に6日周り、指導をしました。セルビアでは年に何度も近くの国で開催される大会に参加しましたが、特にイタリアで開催された世界選手権がよい思い出になっています。世界選手権は3年毎に世界各地で開催されますが、遠い国で開催されるため選手団を送ることができません。イタリアは車で移動できる距離なので、セルビアで初めて、世界選手権に個人も団体も選手を送ることができました。男子は予選を突破して、決勝トーナメントへ。まだ世界のトップレベルには至りませんが、大健闘でした。ひとつでも多く勝つことが、彼らの励みになったらと思います。



▲ 剣道仲間と

剣道を通じて、文化の違いを目的にしながら「国は違って同じ人間」という嬉しさを噛み締めた。

トルコでもセルビアでも、稽古が終わると生徒と一緒にお酒を楽しむのが日課。また後半の1年間は、妻が家族同伴制度を使ってどちらの国にも来てくれたので、折々に剣道仲間を家に呼んで日本料理を振る舞い、楽しい時間を過ごすこともできました。単身生活というのは、やはり味気ないものです。妻が家にいれば仲間を呼んで来てもらうこともできますし、妻自身もいろいろな人に来てもらえばもうほっとします。最初はさほど海外に興味のなかった妻も、様々な国に行くことで、現地の人々や文化に触れる楽しさを感じていたようです。

現地のことを知れば知るほど、母国である日本を意識するようになります。協力隊の方々もそうだと思いますが、それは日本人にとっても大切なことだと思うのです。文化や宗教、言葉や顔つきなどが違って、中身は同じ人間。国を越えて情も生まれますし、親しくなることもできます。私にとって、それはとても嬉しいことでした。

一方で剣道を通じて、文化の違いを目的にすることもありました。例えば団体戦のあと、日本ではお辞儀をして終わります。セルビアでは、お辞儀のあとにお互いに拍手をします。個人戦の場合は、ハグをしたり手を握ったり。日本ではあまり行儀がよくないと思われる行動かもしれませんが、私は「いいことだな」と思いました。いろいろな国に渡り、その国の文化が重なってできた新しい剣道の姿を見る楽しさがあったのです。

セルビアから帰国した後は以前の職場でのアルバイトや、福祉関係のボランティアなどで忙しい日々です。仲間とシニア海外ボランティアの話をするとき「剣道で行けるなんていいなあ、僕も趣味で行けるような専門性があつたら」などと羨ましがられることもあります。

シニア海外ボランティアの経験は、私に多くのものをもたらしてくれました。今後も機会があればトルコやセルビアの良さを日本人に伝えていきたいですし、たくさんの方々がボランティアに参加して第二の人生を謳歌してくれることを願います。



JICA ボランティアで得たもの

趣味の剣道を通じて、一生付き合っていける仲間に出会えた

私がボランティアで得たものは、数え切れません。その中で特に挙げるとしたら、トルコ、セルビアとそれぞれの国で、現地に仲間ができたことです。

例えば私が帰国した翌年、「稽古がしたい」と日本を訪れてくれたセルビアの剣道仲間。朝は監視庁の先生にお願いで面倒を見てもらい、夜は私が指導している稽古場に連れて行き、1ヶ月指導をしたこともありました。

また2015年の5月には、東京で剣道の世界選手権大会が開催されました。その時はトルコからもセルビアからもたくさんの方々が剣道仲間がやってきたので、一緒に食事をするなどして、日本を楽しんでもらったのです。このように、剣道を通じた繋がりは今も途切れていません。

これからJICAボランティアを目指すみなさんへのメッセージ

定年退職後も、自分の知識や技術を活かせる素晴らしい制度

シニア海外ボランティアに挑戦される方には、とにかく楽しんで活動をしていただきたいです。シニアの方は経験も豊富で、いろいろな知識や技術も持っておられます。もちろん、それは仕事に留まりません。私の場合は、剣道という趣味が活きました。趣味をきっかけにして現地に行かせてもらい、人に教えるという任務を果たしながら、国の歴史や文化などの勉強もさせてもらえたこと、大変ありがたく思っています。現地の方々は、シニアの知識や技術に大きな期待を持っています。だから現地では、前向きに楽しくやれたら、それ以上のことはありません。素敵な第二の人生を歩んでください。